

製菓工場から始まった 地域に根ざした文化施設づくりへの長年の取り組み

六花亭製菓 株式会社 殿

中札内村 殿

株式会社 大林組 殿

六花亭製菓のオーナーは、1987年の冬に帯広市郊外の中札内村に約30haの柏林を確保し、自然の中での製菓工場を中心として地域文化を醸成するような地域開発計画を企画立案した。これに対して、中札内村は、これに応える景観・文化施設づくりを行い、大林組は、企画段階から発注者と一体となってコンセプトをまとめ、景観と調和した文化施設的设计、自然再生のランドスケープデザインなどを実践した。そして当初企画から長い年月を経て、“六花の森”と“中札内美術村”と併せて“六花亭プロジェクト”を完成させた。

この計画において特筆すべきことは以下の点にある。

(1) 一企業が、自治体に協力しながら地域の文化づくりに継続的に貢献したことである。地元の坂本直行画伯の作品を掲載した地元小学生たちの月刊の詩集「サイロ」を1960年に創刊、また、北海道の山を描き続けた洋画家の相原求一郎の作品展示を中心とした美術館を開設した。村が主体となり六花亭が後援した全国絵画公募展「北の大地ビエンナーレ」は、1996年に始められたが、今日では、中札内村の重要なイベントの一つとして定着した。これを契機に、その作品の展示を目的とした中札内文化創造センターが建設されるなど、一貫して地域に文化を根付かせる活動を行い、多くの関係者を巻き込んでプロジェクトを推進した努力は賞賛に値する。

(2) 生物多様性と地域景観に配慮した計画となっていることである。中札内村は、この計画に触発されて2001年3月に「豊かな自然を未来につなぐふるさと景観条例」を制定した。中札内美術村では、柏の原生林を可能な限り保存した建物の配置計画が行われて、あたかも柏林と建物が一体となった雰囲気醸し出されている。文化施設づくりをサポートする建設会社の地形・環境に対する解読結果から、敷地内に存在する自然環境のエコロジカルダイアグラムを作成した。そして、現存する地域固有種の保全、河畔林の保全と幼木の植栽による緑のネットワークの創出、さらに地形、河道跡や湧水を利用した湿地ゾーンの回復などを行い、エコロジカルな環境と素晴らしい自然景観の形成に寄与した。

(3) この“六花亭プロジェクト”における建物の資材は十勝地方の開拓の地にふさわしいものが選ばれ、その外観は地域に溶け込んでいることである。相原求一郎美術館は、帯広市で一番古い石造りの銭湯「帯広湯」を移築し、それに増改築して柏の原生林が眺められる重厚な美術館として生まれ変わった。相原求一郎デッサン館（現 KYU ホール）は、帯広では民間初のレンガ造の建物であるが、100年、200年たった建物ストックを社会資本として活用、町並みや景観づくりを目指した。その結果、1998年度「北海道赤レンガ建築賞」を受賞した。

以上のように、官民が二人三脚により地域の豊かな自然を未来に引き継ぐ活動を行い、地域に根ざした文化施設をつくり、地域文化の創造に寄与したことは高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。